

本書の構成と使い方

1 本書は第一部「典型問題篇」と第二部「練習問題篇」から構成されている。「はじめに」で確認したように、論

述問題では内容説明問題と理由説明問題を中心として、本文全体の論旨を踏まえて傍線部を説明する問題、比喻表現を説明する問題、心情を説明する問題などが出題される。「典型問題篇」ではこれらの問題を論述問題の基本的な五つの類型として提示し、それぞれの問題の特徴とそれに対処する上での注意点について述べている。そして、例題1～例題5は、それぞれの類型の問題を中心とした典型的な問題になっているので、注意点を意識しながらこれらの問題を解いてみてほしい。

2 第一部「典型問題篇」の主眼は問題の後に付してある本文解説、設問解説という「解説」の方にあるが、解

説をいきなり読んだりせず、その前に必ず自分の力で問題に解答を出してほしい。その後で解説を読めば、自分の読みのどの点が甘く、今後どういう点に注意して問題文を読み、解答を作成すればよいかが確認できるだろう。「典型問題篇」のねらいは、「練習問題篇」に諸君が取り組む前段階として、典型的な問題を通して文章の読解法、解答の作成法を提示することにあるので、「典型問題篇」をひと通りこなしてから「練習問題篇」に移ってほしい。

3 第二部「練習問題篇」は九章からなり、章立てはジャンル別になされている。ジャンル別による章立ては便

宜的なものであり、入試によく出題されるジャンルという点が考慮されている。また、各章とも㉑と㉒の二題から構成されている。そして、㉑に比較的易しめの問題、㉒に難しめの問題が置かれている。

「典型問題篇」と「練習問題篇」とを問わず、本文解説、設問解説はかなり詳しく丁寧に書いたつもりである。問題を解き終えた後、単に解答例を参照しただけで済ませるのではなく、本文解説をよく読んで問題文全体の論旨と構成を確認してほしいし、設問解説をよく読んで解答の導き方を確認してほしい。

「典型問題篇」と「練習問題篇」とを問わず、それぞれの問題には【配点と採点基準】を付けている。自分が出した答案が何点ぐらいになるのか、どのポイントが落ちていたのか、といった点を確認してほしい。また、「典型問題篇」の【例題】の設問解説では【答案例】を載せ、それを実際に採点した【採点例】を示している。自己採点する際の参考にしてほしい。

次に「論述の基本」と「解答作成上の注意点」を示しておく。

「論述の基本」 問題文全体の論旨と構成を正確につかんだ上で解答する。

論述問題といえども基本になるのは問題文の読解である。問題文を的確に読解することが的確な解答を出すことにつながるし、問題文を深く読み込むことが深みのある解答を出すことにつながるのである。

先にも述べたが、傍線部を説明する場合、一般にそこと密接に対応する箇所を見出し、その箇所を踏まえることが前提になるが、その対応箇所が容易に見出せるかどうかは問題文全体の論旨と構成が正確に把握できているかどうかにかかっている。対応箇所が傍線部の近くにある場合は踏まえやすいが、それが遠くにある場合や複数ある場合では、問題文全体の論旨と構成が正確に把握できていないとそれを十分に踏まえることは難しくなってくるだろう。しかも、問題は基本的にこのような問題文

目次

第一部 典型問題篇

第一章 内容説明問題を解く	12
例題1 立川昭二 「見える死、見えない死」	
第二章 理由説明問題を解く	30
例題2 伊藤亜紗 「手の倫理」	
第三章 本文全体の論旨を踏まえて傍線部を説明する問題を解く	54
例題3 鷺田清一 「『摩擦』の意味——知性的であるということについて」	
第四章 比喻表現を説明する問題を解く	76
例題4 福田恆存 「藝術とはなにか」	
第五章 心情を説明する問題を解く	94
例題5 開高 健 「裸の王様」	

第二部 練習問題篇

社会(I)

- 一 橋爪大三郎「メディアと共生する広告」……………112
- 二 森 正稔「社会思想史の空間論のために」……………116

社会(II)

- 一 岩井克人「未来世代への責任」……………122
- 二 小坂井敏晶「格差という虚構」……………128

文化

- 一 岸田 秀「わたしはなぜ外国語をしゃべるのが苦手か」……………134
- 二 養老孟司「続・涼しい脳味噌」……………138

文学・芸術

- 一 森 常治「いかに読むか——記号としての文学」……………142
- 二 多田道太郎「アウラの追放」……………147

言語

一 田中克彦 「名前と人間」 152

二 柳父 章 「翻訳語成立事情」 157

科学・哲学

一 黒崎政男 「機械と人間の間」 164

二 中屋敷均 「科学と非科学——その正体を探る」 168

随筆(I)

一 中沢正夫 「凹の時代」 174

二 三浦雅士 「小説という植民地」 178

随筆(II)

一 大庭みな子 「虹の橋づめ」 182

二 柳谷郁子 「母の裏切り」 185

小説

一 阿部 昭 「司令の休暇」 190

二 小川洋子 「ことり」 195

本文解説

本文は、「ひとは病いそのものを病むとともに、病名という病いをも病むのである」という認識に立った上で、「時代や社会とりわけ病氣観・医療観によって異なる」「病いの命名法」ターミノロジーについて論じた文章である。

便宜上、本文を前半部と後半部の二つのまとまりに分け、それらのまとまりごとに解説を進めていきたい。

I 前半部(第一段落～第六段落)

ここでは、病名が与えられることによって病いは病いになるという考えが述べられている。

まず、病いが病いとなるのは、病識をもつこと、すなわち日常あるいは他者とは異なる心身の、ある生理的な現象や感覚を意識し、ことばをさがして意味づけることによってはじまる、と述べられる。たとえば、痛む・腫れる・熱がある等々というように。しかし、それが病氣としてもつとはつきり位置づけられるためには、その変化や異常に対して病名が与えられる必要があるという。たとえば、「胃の具合が悪い」という症状に対して「慢性胃炎」という病名が与えられるはじめて、それは社会における共通認識の病氣となるのである。(第一段落・第二段落)

次に、このような「病名をつけること」、つまり「診断」を重視するのが近代西洋医学に基づく現代医療であり、この診断重視の思想は「特定病因説」に根ざしていると指摘される。「特定病因説」とは文字通り病氣には特定の原因があるとする考え方のことをいうが、現代医療は「診断」によって「病因」を特定し、病名をつけることを重視するというわけである。「病因」が特定できれば、後はその「病因」の除去に努めさえすればいい。このような現代医療に対して、東洋医学は病名よりも症状を重視するため、「ホリスティック全体的医療」ともいえると述べられている。(第三段落)

さらに、「病名」がひとに及ぼす影響について論じられる。病氣であつても病名が与えられないときは、単に「病理学的に」病氣であるだけである。しかし、病名が与えられるとき、病名はさまざまな人間的・社会的な意味をもっている。ひとは病名が与えるさまざまな反応や影響につよく支配されるようになるのである。筆者によれば、私たちは病名を与えられてあらゆる意味においてその病氣になる。すなわち、「ひとは病いそのものを病むとともに、病名という

病いをも病むのである」。このことは、古代エジプトにもがんがあったにもかかわらず、がんという病名を「知らない」古代エジプト人は今日とおなじ意味でがんにかかっていたとはいえない、という例によっても確認できるだろう。(第四段落～第六段落)

ここまでの内容を整理して、二つの図にまとめておこう。

病名が与えられてはじめて病いは病い(＝社会において共通認識された病気)になる

+

病名はさまざまな人間的・社会的な意味をもつため、ひとはそれが与えるさまざまな反応や影響に支配される

↓病名が与えられたとき、ひとは病いそのものを病むだけでなく、病名という病いをも病む

↔

病名を与えられていないとき、ひとは病理学的に病いそのものを病むだけである

(図1)

近代西洋医学に基づく現代医療は特定病因説に根ざし、診断(＝病名をつけること)を重視する

↔

設問解説

問一 傍線部と関連する部分を抜き出す問題

まず、傍線部Aのある第三段落から、〈病気にはそれぞれ特定の原因があるとする考え方〉である「特定病因説」が近代西洋医学の考え方であることがわかる。そして、この考え方が、東洋医学の「ホリスティック全体的医療」と対比されていることから、「特定病因説」に基づく近代西洋医学の治療法は身体の一部に巣くう〈特定の病因〉の除去に努めるものになるだろうと推測できる。本文解説の図2と図4を参照してほしいのだが、本文において近代医学およびその治療法について言及しているのは、第三段落のほか第十一段落・第十二段落（最終段落）だけである。最終段落中にある「近代戦」という言葉からそのことが判断できる。そこで、これらの段落に着目してみると、第十一段落中に、「病いの苦痛は、ひたすら薬やメスによって根絶し切除する対象にすぎない」という箇所を見いだすことができる。この箇所が、設問が要求している「特定病因説」に基づく治療法を具体的に述べた部分であり、「ひたすら薬やメスによって根絶し切除する」(19字)という解答が得られるだろう。

問二 傍線部の内容を説明する問題

まず、傍線部イが、第四段落・第六段落で論じられている、ひとは病いそのものを病むだけでなく病名という病いをも病むのだというテーマと密接に関連していることをつかもう。そうすれば、傍線部イはその前後の内容を踏まえて説明すればよいということがわかるだろう。傍線部イの直前に、家康がこんにちでは胃がんと推定されている「腹中の塊」で死んだと書かれている。これは、家康ががんという病いそのものを病んではいても（Ⅱ「病理学的にはがんであっても」、がんという病名が知られていなかったため、がんという病名の病いは病んでいなかった、ということの意味している。このことを踏まえて、「当の家康はこんにちの意味でいうところのがんという病いを病んだとはいえない」(傍線部イ)といっているのである。ここまでで、a〈家康はこんにちのがん患者とおなじくがんという病いそのものは病んでいた(病理学的にはがんであった)ということ〉、しかしb〈こんにちと違ってがんとい

う病名が与えられていなかったため、がんという病名の病いは病んでいなかったということが、傍線部の説明として必要な要素であると確認できるだろう。これだけでも一応は傍線部の説明になっているのだが、bについてはまだ十分とはいえない。なぜなら、傍線部イの少し前にがんという病名の病いについての説明があるからである。がんという病名は「さまざまな人間的・社会的な意味をもつて」おり、「ひとはそれが与えるさまざまな反応や影響につよく支配される」のだという。ここに述べられているcへさまざまな人間的・社会的な意味をもっているがんという病名が与えるさまざまな反応や影響につよく支配されるということが、がんという病名の病いを病むことである。そして、がんという病名が与えられることのなかった家康は、このような状況に立たされることもなかったわけなのである。以上のa～cの要素をすべて盛り込むことができれば、十分な解答が得られたことになるだろう。

(図1参照)

この問題の場合、傍線部の前後を踏まえただけで十分な解答を導き出すことができるので、一つのポイントも満たすことができないまったく的外れな解答を出すといったことは考えにくい。したがって、この種の問題ではどれだけの必要なポイントを満たすことができたかが課題となるだろう。

【答案1】

病いそのものは病んだが、^a 診断学での「がん」という病名をつけられること
 によって、^{3/3} (病名という病いを病むことはなく)、^b 「腹中の塊」という症状を
 もったにすぎないという点で、^{6/10} こんにちのがんとは異なるということ。
^a ^{3/3}

この部分の説明(c)が必要